

# アカデミック英語能力習得を可能にする内容言語統合型教育の実践

## －4つのCに基づいたCLILカリキュラムの構築－

前川 洋子・奥西 有理\*・丸山 糸美\*\*・ジェーン オハロラン\*\*\*  
高嶋 恵三\*\*\*\*・濱谷 義弘\*\*\*\*\*・柳 貴久男\*\*\*\*\*

岡山理科大学理学部臨床生命科学科

\*岡山理科大学教育学部中等教育学科

\*\*岡山理科大学教養教育センター

\*\*\*岡山理科大学工学部建築学科

\*\*\*\*岡山理科大学理学部応用数学科

\*\*\*\*\*岡山理科大学総合情報学部情報科学科

### 1. はじめに

社会のグローバル化が進み、大学教育においても国際化が強く求められている。文部科学省（2003）が「英語が使える日本人」の育成のための行動計画を策定し、大学教育では専門分野に応じて仕事上必要な英語力を身につける、と目標設定してから15年間、その目標達成のために英語による教科教育の実施など、より実践的な英語教育が推奨されてきた。それに伴い、専門的な内容を含めた英語教育として English for Specific Purposes (ESP= 特定の目的のための英語) と呼ばれる研究分野が発展し、学習者のニーズや将来のキャリア形成を踏まえた実践的・実用的な教育アプローチが検討されてきた。しかし、単一言語社会とも言える日本では、多くの学生にとって英語は教室内でのみ使用される言語であるため、英語を仕事上で使用する状況を想像することは困難で、英語使用者としての当事者意識を持たせることは容易ではない。更に日本の中学校・高等学校における英語教育も語彙・文法知識の獲得に力点が置かれていることが多く、コミュニケーション手段として英語を捉える環境も十分整備されているとは言い難い。特に理工系の学生にとっては、専門分野の学びに時間が取られることもあり、英語学習に時間を割く余裕がないとも言えるだろう。

このような状況下で、英語を「手段として用いた」専門教育を実施するにあたっては、既得の言語的知識や専門知識が未熟である場合も多く、英語が学習手段としての機能を十分に果たせないという問題が生じるため、言語的にも専門的にも学びの質を確保できるか大きな課題となっている。そこで筆者らは、教育改革推進事業の一環として、アカデミック場面での学びにフォーカスした学習言語 (CALP = Cognitive / Academic Language Proficiency) 獲得支援を目指し、教科学習と言語学習を融合させて、両者を同時に習得さ

せることを狙い、CLIL (Content and Language Integrated Learning = 内容言語統合型学習) を実験的に既存の授業へ導入する試みを行った。この実践により、英語による教科教育の効果的な運用方法について検証し、グローバルで魅力ある学びの環境づくりのサポートを目指した。

## 2. CLIL: Content and Language Integrated Learning (内容言語統合型学習)

### 2-1 CLIL の概要と 4 つの C

CLIL は、1990 年代より欧州で発展してきた教育方法で、その名が示す通り、言語教育と言語以外の教科の内容教育とを統合した形で行うことが特徴である。専門的な内容を含むアカデミック場面を考慮した英語教育については、日本においても 1990 年代後半から 2000 年代にかけて ESP の分野で発展的に研究され、特に理工系学生のニーズを考慮した実践的・実用的英語教育は広く試みられ、専門教員との協働的な授業も行われてきた。しかしこれらの実践は語学教育の一環に止まってしまうなど、専門の深い内容理解には多くの課題が残されてきた (福井・野口・渡辺, 2009; 深山, 2000; 寺内, 1995; 寺内・山内・野口・笹島, 2010)。また、言語と教科を統合した教育法としては、イマージョン教育や CBI (Content-based Instruction=内容中心教授法) が挙げられる。イマージョン教育はカナダのフランス語圏で特に発展し、ネイティブの教科教員がターゲット言語 (習得したい言語) を用いて教科を教えることで副次的にアカデミックな言語の習得も目指すものである。日本でも実践例があるが、いずれも主目的は教科教育である。一方で CBI は、専門科目の内容を取り扱うが、言語習得が目的とされているため、教科内容の深い理解を目的とはしていない (池田, 2012)。

CLIL の特徴は、「統合」とも言われ、内容と言語の統合だけでなく、上記に挙げられた様々な教育原理や理論の統合、知識の獲得と学習スキルの獲得の統合、高次の思考力や対人交渉力を代表する社会人として必要な汎用能力を統合した資質や能力の育成も含まれるとされる (池田, 2011; 和泉, 2016; 笹島 et al., 2011)。この CLIL の中核は内容 (Content)、言語 (Communication)、思考力 (Cognition)、協学 (Community / Culture) の 4 つの C の「統合」であり、この枠組みに即した教材作成、授業計画、指導を行うものと定義されている。4 つの C は以下のように説明される。

内容 (Content) : 語学以外の教科内容であり、新しい知識やスキルを身につけ、理解することを意味する。

言語 (Communication) : 単純に語学学習で学ぶ言語知識 (語彙、文法、発音) 獲得や 4 技能 (読む、書く、聞く、話す) 訓練に焦点を置くのではなく、対人コミュニケーションや教科内容 (Content) を理解するために使用する言語の習得と使用を意味する。池田 (2011) は CLIL で学ぶ 3 つの言語を Language of learning (学習の言語 : 単元の重要語句や必須文法項目といった内容理解に直結する言語)、Language for learning (学習のための言語 : 英語で学ぶ際に必要な表現や言語スキルであり、議論の方法、情報収集方法、レポートの書き方等)、Language through learning (学習を通しての言語 : 上記 2 つの言語を結びつける繰り返しの言語) と定義している。

思考力 (Cognition) : CLIL では、知識の獲得だけでなく、考える力を養うことを重要と捉えており、思考力を伸ばすための教育活動を考える。そのために、Bloom によりまとめられた思考の分類 (taxonomy) を援用し、LOTS (Lower Order Thinking Skills=低次の思考力) と HOTS (Higher Order Thinking Skills=高次の思考力) に分け、CLIL の授業を実践することになる。つまり、前半では新出単語の「記憶」、内容の「理解」、新しい用語や概念を使ったディスカッションのような「応用」など LOTS を中心とした活動を行った上で、少しずつ客観的な「分析」(比較・整理) や自分で基準を設けた「評価」を行う。そして、最終的には問題解決や発表などの「創造」を行うというように、HOTS へと活動を発展させていく。特に CLIL では HOTS が重視され、教師は授業で実施する言語教育活動がどの力にあたるかを考慮した上で、思考を促すような授業計画を立てることが求められる。

協学 (Community / Culture) : CLIL ではペアワークやグループワークを通して、言語を使用するだけでなく、クラスメートの経験や意見を取り入れ、共に学ぶという協働が多用される。これによって、Community を意識し異文化理解や国際理解にも結び付ける。

上記 4 つの C を考慮した CLIL の授業においては、コミュニケーションを多用する学生中心の活動 (アクティブラーニング) を行い、実社会や専門のコアに即した題材や資料を利用し、音声・視覚 (映像、図、数字など) の情報を多く用いた教材や課題を用いるため、学習動機づけにもつながると期待されている。CLIL 実践を効果的に行う 10 大原則を池田 (2012, p.6) は、表 1 のように提示している。

表 1 CLIL の 10 大原則

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 内容学習と語学学習の比重は 1 : 1 である。</li> <li>2. 4 技能 (読む・聞く・書く・話す) をバランスよく統合して使う。</li> <li>3. タスクを多く与える。</li> <li>4. さまざまなレベルの思考力 (暗記、理解、適用、分析、評価、創造) を活用する。</li> <li>5. 協働学習 (ペアやグループ活動) を重視する。</li> <li>6. 異文化理解や国際問題の要素を入れる。</li> <li>7. オーセンティック素材 (新聞、雑誌、ウェブサイトなど) の使用を奨励する。</li> <li>8. 文字だけでなく、音声、数字、視覚 (図版や映像) による情報を与える。</li> <li>9. 内容と言語の両面での足場 (学習の手助け) を用意する。</li> <li>10. 学習スキルの指導を行う。</li> </ol>
--

## 2-2 岡山理科大学での CLIL 実践に向けて

日本における CLIL 教育は、小学校や中学校レベルを中心として実施されており、大学での専門教育においては萌芽的であるため、教材も実践例も少ない。つまり、授業を考えるにあたっては、教材や活動を選ぶ最初の段階から教師が考えなくてはならないことになる。池田 (2011) は「柔軟性」も CLIL の特徴のひとつであるとし、学生の既得知識や語学レベル、授業の回数に合せて、目的 (語学習得と内容学習のどちらに重点を置くか) や英語

使用の比率（英語のみかバイリンガルにするか）、教材や活動にバリエーションを持たせることが可能としている。表 1 の 10 大原則を参考にしつつ、受講生に合わせた目標設定や教材選びが出来ることは、教師にとって利点と言えるだろう。従来の英語教育においては、学生の既得の言語知識や活用スキルが未熟であることが多いため、言語を活用するための授業では BICS (Basic Interpersonal Communication Skills=生活言語) を主として扱わざるをえなかった。しかし、国際社会に生きる学生達にコミュニケーション手段としての英語を認識させ、キャリア形成や専門の学びの一環として、よりアカデミックに深く英語を学ぶ姿勢を持たせるには、専門分野で使われる英語を教科内容と融合させながら教育的な支援を行うことが有用と思われる。しかし、教科によっては英語も教科内容も知識不足であるため、英語で書かれた専門分野の内容が理解できない、教科内容に対する知識が十分あっても、それを手がかりにして英文理解に繋がる力がない、更には英語でも日本語でも自己の考えをまとめて伝える力が不足している等が課題となっている。CLIL の重要な要素として **Cognition** (思考力) があるが、まさしくその力を身につけるべき学生が多いとも言えるだろう。これらの課題を踏まえながら、学生がアカデミックな学習言語としての CALP を習得し、自らの考えを英語で表現するアウトプットを通して考える力を養うための試みとして、CLIL を用いた英語による教科教育の実践を行うことになった。本実践では、専門教育ができる語学教員と語学教育ができる専門教員が協力して、専門教育と語学教育を融合する効果的な運用方法を検証し、2018 年度から開講される専門英語の効果的教育法に繋げていくことを目指す。2017 年度は、第一筆者が 2 年生対象の英語共通教育科目において基礎的な物理を 3 回、第二筆者が教育学部の 2 年生を対象に文化理解を 3 回に分けて実践した。次項では実践の詳細を紹介する。

### 3. CLIL カリキュラムの構築と実践

#### 3-1 基礎物理

第一筆者は、2 年生を対象とした総合英語Ⅳの授業（3 クラス）内において、英語で書かれた基礎的な物理（力学）の問題を解きながら、力学の基礎を学ぶ授業を 3 週間実施した。第一筆者は英語教員であるが、工学を学んだ経験があり力学の基礎については理解している。本実践で使用した問題は、摩擦のない傾斜面におかれ、ロープで木に繋がれたソリの重さからロープにかかる力と垂直抗力を求めるものである。問題は物理のリメディアルとも言える基礎的な問題だが、理学部や工学部の中にも物理が苦手な学生は多いため、英語だけでなく物理の面でも新しい知識の学びと言えるだろう。授業の最終目標は、1) 力学（第二法則、垂直抗力、力のつり合い）の概念を理解する、2) 力学で用いられる英語の語彙を身につける、3) 英語で書かれた第二法則の問題に解答できるようになることとした。2-1 項で紹介した 4 つの C に基づく授業実践案は表 2 の通りである。

授業は、上記の 4 つの C に基づき、最初は英単語の理解から英文理解に繋げ、グループディスカッションを通して内容理解を行い、最終的には理解した内容を発表する、又は英語で文章にまとめる創造へと導くように進めた。グループディスカッションについては、少しずつディスカッションの内容や思考が深まるように、段階を追った質問を設けた。授業は原則として英語のみで進め、受講生にも予めその旨を伝えた。しかし、実践を行った 3 クラスのうち 2 クラスは英語レベルが低いため、英語のみでの授業では指示や内容理解が

進まないで、受講生の理解不足が見られる場合は、英語で話した後に日本語で説明をするバイリンガル形式で行った。また、英語レベルが高いクラスにおいても、グループ活動においてはより活発なディスカッションを促し、受講生の不安を軽減するために、日本語を使う事を許可したが、各グループの意見発表と文章提出は英語で行わせた。これらは、表1で示した10大原則内「9.内容と言語の両面での足場を用意する」に該当する。

表2 力学の CLIL 授業実践案

4つのC	1 <sup>st</sup> CLIL class	2 <sup>nd</sup> CLIL class	3 <sup>rd</sup> CLIL class
Content (内容)	「第2法則」と「垂直抗力」について理解する。	「第二法則」「垂直抗力」の概念を復習し、「力のつり合い」を理解する。	「第二法則」「垂直抗力」「力のつり合い」を復習し、応用問題を解く。
Communication  ・学習の言語  ・学習のための言語  ・学習を通しての言語	<p><u>学習の言語</u> the second law, normal force, equilibrium, frictionless, exert, magnitude, object, tension</p> <p><u>学習のための言語</u> Do you know the second law? Who made the law? Do you know the normal force? Find the symbol indicating the normal force from the figure. What value do you have to obtain? Can you think of any examples of the second law in your daily life? What are the examples of the normal force in your daily life? Discuss in your group.</p> <p><u>学習を通しての言語</u> 授業計画の段階においては未詳</p>	<p><u>学習の言語</u> tilted, coordinate, y-direction, tension, x-direction, condition, friction, equilibrium</p> <p><u>学習のための言語</u> Do you remember the second law / the normal force? It's convenient to use... as in Figure... In the absence of friction... Because the sled is at rest, ... apply What does the equation <math>\Sigma F_x = 0</math> mean? Can you think any examples of equilibrium? If the condition changes (a car on a hill), what else do you have to think?</p> <p><u>学習を通しての言語</u> 授業計画の段階においては未詳</p>	<p><u>学習の言語</u> steep, remain, be affected, climb, acting</p> <p><u>学習のための言語</u> Consider the same scenario... Would the magnitude of the tension in the rope get larger, smaller, or remain the same as before? Suppose a child climbs onto the sled... What do you have to consider? How could you solve these problems?</p> <p><u>学習を通しての言語</u> 授業計画の段階においては未詳</p>

表 2 続き

	1 <sup>st</sup> CLIL class	2 <sup>nd</sup> CLIL class	3 <sup>rd</sup> CLIL class
Cognition (記憶・理解・ 応用・分析・評 価・創造)	<u>記憶・理解・応用 (LOTS)</u> 「第二法則と垂直抗力」を理解し、関連新出語彙を記憶し、それを使用する。  <u>分析・創造 (HOTS)</u> 身近にある例を話し合いながら、第二法則と垂直抗力について説明する。	<u>記憶・理解・応用 (LOTS)</u> 「力のつり合い」に関する語彙を記憶し、理解する。  <u>分析・評価・創造 (HOTS)</u> 身近な例を考えながら、力のつり合いについて、分析、評価する。話し合った内容について、英語で文章を作る。	<u>理解・応用 (LOTS)</u> 問いの内容を理解し、前週までに学んだ内容を応用する。  <u>分析・評価 (HOTS)</u> 応用問題を解き、最初の問いからの条件の違いを分析する。解き方を発表し、互いに評価する。
Community (協学)	グループで、単語のマッチングやディスカッションを行う。	グループで話し合い、ディスカッションを行う。	グループで話し合いながら問題を解き、分析する。 クラス全体で解き方を評価する。

### 3-2 文化理解

第二筆者は、英語教育専攻の 2 年生が受講する選択科目「多文化コミュニケーション活動」において文化理解の授業を 3 回（英語による座学の授業 2 回＋フィールド実習 1 回）実施した。第二筆者は英語科教育の教員であるが、社会・文化心理学を研究上の専門としており、今回の教育実践のテーマは、「儒教の教えから考える現代日本の学校文化」であった。本実践を通して目指したのは、日本の学校文化の特徴について国際的な潮流の中で理解し、英語を用いて日本文化や日本の教育的価値観についての的確に説明することのできる能力の育成である。儒教の世界観は、親子関係を核とする上下関係や高い道德意識からなり、この世界観は東アジア各国において、現在でも形を変容させながら存続している。現代日本の教育においてもその影響を見ることができる。日本の教育の文化的価値観を客観的に洞察し、国際コミュニティにおいて、それを発信する力を養うことが当該科目の目標であるが、それは同時に、CLIL の目指す、「語学教育を地球市民教育へと展開していく」ことにも繋がるものである。具体的な学びのステップであるが、最初の 2 回の実践は、基本的知識の理解や関連語彙の確認から始め、与えられた事例についての意見交換を通して考えを深めさせるようにした。次に、グループ内で交換された意見を集約し発信するという創造 (HOTS) のレベルまで発展させて行った。3 回目の実践においては、意見交換の場

を意図的に創出した小規模サイズの国際コミュニティ<sup>1</sup>にまで広げていき、教室外で国際的な学びの共有体験をさせることで、よりリアリティーのある学びを実現しようとした。各回の学びがどのように深まっていくのかについては、表3の4つのCに基づく授業実践案に計画を記載した。

授業は、ほぼ全て英語のみを用いて進められたが、普段から英語学習の機会が多い英語専門の学生であったため、聞き取りや内容理解、また発表においても大きな問題は生じなかった。グループディスカッションについては、グループごとに活発さの程度において差はみられたものの、全てのグループが与えられた制限時間内に求められた討論課題を終えることができ、話し合った内容をまとめて結論を発表するところまで辿り着くことができた。1回目と2回目の授業には授業者である第二筆者以外に当該 CLIL プロジェクトメンバーの教員3名が視察に来ていたが、うち2名の教員がグループディスカッションや発表の際、授業者の求めに応じて声掛けや質問の投げかけなどのアシストを行った結果、学生のコンスタントな英語発話が促された。実施回数を経るにつれ学びがどのように深まっていたかを確認するため、1回目および2回目の授業の最後にそれぞれ、関連語彙と内容理解度を確かめるための記述式テストを実施した。

表3 文化理解の CLIL 授業実践案

4つのC	1 <sup>st</sup> CLIL class	2 <sup>nd</sup> CLIL class	3 <sup>rd</sup> CLIL class
Content (内容)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 儒教の最も根本的な教えを理解する。</li> <li>・ 人間社会を効果的に治める方法について考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 儒教で重視される人間関係が社会全体に与える影響について考察する。</li> <li>・ 現代日本の学校文化に儒教が与えた影響について考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 海外学生と共に儒教と関わりの深い世界最古の公学校、旧閑谷学校を訪問する。</li> <li>・ 日本の学校文化と儒教に関する学習体験を共有し、意見交換を行うことで、国際的な協学を実現する。</li> </ul>
Communication  ・ 学習の言語  ・ 学習のための言語  ・ 学習を通しての言語	学習の言語 filial piety, warring states period, inferior to, superior to, Confucius, Confucianism, order and harmony, high moral character, ruler and subject	学習の言語 influence of Confucianism, hierarchical relationship, basis of morality, harmonious society, filial piety	学習の言語 the feudal lord, Confucius, enshrined, the lord of Bizen Province, quiet and peaceful valley, school for commoners, better public morality

<sup>1</sup> 2017年夏休みに選択科目「多文化コミュニケーション活動」実施のために招聘したスペイン、ドイツ、韓国、イタリア人学生からなる集団を指す。

表 3 続き

	1 <sup>st</sup> CLIL class	2 <sup>nd</sup> CLIL class	3 <sup>rd</sup> CLIL class
	<p><u>学習のための言語</u> Let's work on the problems in groups. Discuss and exchange opinions. Do you know the teachings of ---? Suppose you are ---. What would you do to create order and harmony? Using role cards, try to speculate.</p> <p><u>学習を通しての言語</u> 授業計画の段階においては未詳</p>	<p><u>学習のための言語</u> Let's work on the problems in groups. Discuss and exchange opinions. What does---mean to you? If you do not respect---, what problems may happen? If one knows how to respect---, what would they do to other people in society?</p> <p><u>学習を通しての言語</u> 授業計画の段階においては未詳</p>	<p><u>学習のための言語</u> Let me explain---. This is ---. Do you know anything about---? What do you think about---?</p> <p><u>学習を通しての言語</u> 授業計画の段階においては未詳</p>
Cognition (記憶・理解・応用・分析・評価・創造)	<p><u>記憶・理解・応用 (LOTS)</u> Confucius, Confucianism, warring states period, high moral character, order and harmony, inferior, superior などの関連語彙の意味を英語での説明により理解し、意味を記憶する(理解と記憶)。覚えた単語を用いながら英語でグループ討論を行う(応用)。 <u>分析・評価・創造 (HOTS)</u> グループで、孔子の提唱した人間関係の持ち方について優劣の視点から分析し(分析)、その意味や価値についても考え(評価)、発表する(創造)。</p>	<p><u>記憶・理解・応用 (LOTS)</u> 1回目と同様に、関連語彙の意味を英語による説明を通して理解し、記憶する(理解と記憶)。覚えた単語を用いながら英語でグループ討論を行う(応用)。 <u>分析・評価・創造 (HOTS)</u> 孔子の提唱する親孝行の役割について分析し(分析)、それが社会全体の秩序や平和にどのように貢献していく可能性があるのかについて考え(評価)、発表する(創造)。</p>	<p><u>記憶・理解・応用 (LOTS)</u> 儒教・日本の教育・関谷学校について、基本的な内容を理解し(理解)、関連用語を覚えて(記憶)、事前オリエンテーションや訪問の当日に海外学生に対して説明する(応用)。 <u>分析・評価・創造 (HOTS)</u> フィールド実習により習得した体験的知識を、海外学生と意見交換することにより、より複眼的な視野から発信できるようになる(創造)。</p>
Community (協学)	4名程度のグループになり英語で話し合いならロールカードを模造紙上に配置、人間関係の優劣とその意味について共に考えていく。	4名程度のグループになり、与えられたディスカッションテーマについて英語で話し合いながら共に考えを深めていく。	日本人学生と海外学生の国際混合グループでフィールドを巡り、教育や日本文化について説明、意見を交わしながら共に考えを深めていく。



## 4. 実践の考察と展望

### 4-1 基礎物理

3-1項で紹介した力学に関する実践を CLIL の 10 大原則を基に振り返る。「3.タスクを多く与える」、「4.様々なレベルの思考力を活用する」、「5.協働学習を重視する」を実践の準備において最も重視した。つまり、タスクを多く与えることで学生が互いに協力し合いながら自ら学び、段階を追いながらより深く思考するよう工夫した。また、「7.オーセンティック素材の使用を奨励する」については、内容の特性からウェブ情報などを使用することはなかったが、概念を理解するために身の回りにある力学の例を考えさせるなどのタスクで実現することはできたと言える。「8.文字以外の情報を与える」についてはスライドや配布資料にヒントとなる画像を用意した。「9.内容と言語の両面での足場を用意する」「10.学習スキルの指導を行う」は、段階を追いながら行う活動自体が足場がけであり、どのようにして理解を深めるかといった学習スキル指導に当たるだろう。「6.異文化理解や国際問題の要素を入れる」については、授業内容の特性もあり実践が難しい所があった。また、「1.内容学習と語学学習の比重は 1:1 である」、「2.4 技能をバランスよく統合して使う」についても学生の英語力や内容の特性から完全とは言い難い。しかし、英語理解についても内容理解についても、学生が互いに助け合いながら自ら考え学ぶ授業にできたと言えるだろう。

当然のことだが、専門英語を理解するには、英語知識だけでなく専門基礎知識も必要である。CLIL 授業のグループ活動においては、力学の概念、英文や単語の意味について理解した受講生が、まだ理解が出来ていない又は意見の異なるグループメンバーにそれを説明する様子が見られた。つまり、教材や授業の進め方を工夫することで、教師の説明を聞くだけの授業ではなく、受講生同士が協働を通して互いの知識を補完し合い、深い思考へと導く、アクティブラーニングの実践でもあった。更に個々の学生が自身の英語知識と専門知識を補完し合うような活動を取り入れることで、英語と専門双方の学びを深め、既得の知識を活用する学習スキルの獲得も促せたのではないだろうか。

### 4-2 文化理解

文化理解についても、CLIL の 10 大原則を基に実践を振り返ってみたい。今回の実践で厳守できたと考えられるものとしては、「1.内容と語学学習の比重は 1:1 である」「3.タスクを多く与える」「4.さまざまなレベルの思考力を活用する。」「5.協働学習を重視する」「6.異文化理解や国際問題の要素を入れる」「8. 文字だけでなく、音声、数字、視覚による情報を与える」「9.内容と言語の両面での足場を用意する」の 7 項目を挙げることができよう。ビジュアル情報に満ちたパワーポイントを用いながら、考えさせる言語タスクを多く与え、有効な協働的学びの環境を意図的に創出することができた。2 名の教員のアシストを得たことで、グループ討論や発表の場面において学生の思考力を高めるための適切かつ十分な問いの投げかけや、言語面でのきめ細やかなサポートを行うことができた。これらが学生にとって有効な足場がけとなり、学習を効果的に機能させていたと考えることができる。視覚的な教材や音声教材を多く用いたことも、学習者への足場がけとして機能し、難しいコンセプトの理解が促進されていったと考えられるであろう。

一方で課題も残る。今回の実践では英語で話すことと聞くことに重点が置かれ、英語で書くことと英語で読むことの 2 つのスキルについては、限定的な使用しか実現できなかった。

た。読むことについては、授業で表示されたパワーポイント上の文字を読むこと、フィールド実習で訪れた施設のパンフレットやサインの英文を読むことに終始したが、学生の既得の読解力を考慮すればより高レベルのリーディングタスクを与えることが適切だったかもしれない。また、書くことについても、英語でのスピーチや発表に先立って英文を書いて準備するという作業に限定されてしまった。4つのスキルをバランス良く組み込んでいくことについての難しさが明らかとなった。学生の授業実施時点での4スキルそれぞれのレベルについての的確に意識し、現状のレベルよりワンステップ上を目指したタスクをバランスよく準備することが、将来の実践に向けて十分検討されるべき課題であろう。

#### 4-3 今後の展望

本稿では、授業実践内容について述べたが、受講生がどのように受け止めたのか、どのような学習効果があったのかなどの検証は必要だろう。CLILはコミュニケーションやグループ活動が多いため、受講生個人や集団(クラス)の特性によって、効果が異なる可能性も考えられる。また、今年度実施した授業に加えて、他の授業をどのように実践するのか検証する必要もあろう。CLIL教育改革事業では、次年度、他教科でも同様の実践を行い、更に受講生への質問紙調査を通して、学習効果や動機づけの側面についても検証し、本学の学生の専門英語習得を可能にするためのより有用な授業やカリキュラムの構築について提案する。

#### 参考文献

- 福井希一・野口ジュディー・渡辺紀子：ESP的バイリンガルを目指して 大学英語教育の再定義，大阪大学出版会(2009)
- 池田真：CLILの原理，和泉伸一・池田真・渡部良典（共著）：CLIL（内容言語統合型学習） 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法，上智大学出版，pp1-13(2011)
- 池田真：CLILの原理と指導法，和泉伸一・池田真・渡部良典（共著）：CLIL(内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第2巻 実践と応用)，上智大学出版，pp1-15(2012)
- 和泉真一：フォーカス・オン・フォームとCLILの授業，株式会社 アルク(2016)
- 深山晶子(編)：ESPの理論と実践ーこれで日本の英語教育が変わる，三修社(2000)
- 文部科学省：「英語が使える日本人」の育成のための行動計画（2003）
- 笹島茂・Mehisto, P.・Marsh, D.・Frigols, M. J.・斉藤早苗・池田真・Hemmi, C：CLIL 新しい発想の授業ー理科や歴史を外国語で教える!?-，三修社(2011)
- 寺内一：ESP的アプローチによる大学英語教育：法学部英語教育に対する学生・英語教師・法律教師の意識調査分析結果をもとに，大学教育学会(JACET)第36回全国大会(1995)
- 寺内一・山内ひさ子・野口ジュディー・笹島茂（編）：21世紀のESPー新しいESP理論の構築と実践，大修館(2010)